

令和 6 年 6 月 4 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00673

研究課題名(和文) 英語の脱規範性・変則性を生み出す力を解明するためのフレイジオロジー的実証研究

研究課題名(英文) Phraseological descriptive investigations on triggers of "de-prescriptive" and irregular phenomena in English

研究代表者

住吉 誠 (Sumiyoshi, Makoto)

関西学院大学・経済学部・教授

研究者番号：10441106

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題で、脱規範性や不規則性を示す英語のデータを多く収集できた(例：It is common that...のパターン、二重that構造、構造的冗長性を示す of、従来以上に動詞や名詞が補文構造を多様化させている実例、文法書・語法書の記述と一致しない関係詞の例など)。

また、収集したデータをフレイジオロジーの観点から分析し、英語における脱規範性・変則性を生む力として、語とフレーズ間の意味的関係の重要性を指摘した。従来のように単なる語と語の関係だけではなく、語と共に使用される、または語が生じるフレーズ全体の意味が脱規範的・不規則的文法構造の選択に影響を及ぼすことを明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、英語が持つ脱規範性・変則性を多くのデータで例証し、従来正誤の問題として考えられてきた規範を、英語の構造や成り立ちに影響を与えうるものとしてとらえなおしたことにある。多くのデータを分析しながら、脱規範的・変則的構造を生む誘因として、語とそれが現れるフレーズ全体の意味的関係を指摘した。脱規範性・変則性の解明にフレイジオロジー的視点からの考察が不可欠であることを示しながら、規則性を重視する従来の研究とは異なる立場で脱規範性・変則性に焦点を当てて言語の仕組みに迫ることで英語の理解の深化に貢献したことも、本研究課題の意義として挙げることができる。

研究成果の概要(英文)：During the four years of investigation, a wide variety of authentic English examples were collected, all of which showed "de-prescriptive" or irregular phenomena in English. Included in the data were (i) adjectives that were said not to occur in the "it is Adj. that" pattern, (ii) "double 'that' construction," (iii) syntactically redundant "of," (iv) verbs or nouns that are used in syntactic patterns that they are said to incompatible with, (v) "de-prescriptively used relative adverbs," etc.

On the basis of phraseological analyses of such phenomena, it was argued that it is important to focus on the semantic relationships between words and whole phrases that those words occur in or are used with, rather than the relationship between words, in order to identify the triggers of "de-prescriptive" or irregular phenomena in English. The meanings of whole phrases have a (sometimes tacit) influence on the choice of de-prescriptive or irregular syntactic constructions.

研究分野：英文法

キーワード：脱規範 フレイジオロジー 変則性

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 規範の見直し

2000年以降、正誤の問題としてのみ考えられてきた規範の見直しが進められていた。例えば Curzan (2014) は、規範が英語の成り立ちに大きな影響を与えてきたことを論じた。また、理論的な言語学者の内省判断が教育で身につけた規範によって大きな影響を受けることも指摘され、内省データが時に英語の実態と乖離を見せる要因のひとつであるという認識が広まっていた (Milroy and Milroy 1999 など)。

(2) 英語の脱規範的・変則的表現が持つ重要性の認識の広まり

Radford (2018) は、多数の実例を引用しながら、従来非文とされた構造が頻繁に使用されていることを明らかにした。また、住吉 (2016) でも、実例やコーパスデータをもとに脱規範性・変則性を示す英語の表現が論じられた。また、従来の規則性を追求するモデルとは異なり、言語の大部分がこのような脱規範構造や変則形で成り立っていることを指摘する研究も増加傾向にあった (Hill 2000; Siepmann 2008; Taylor 2012)。脱規範形・変則形を考察することは、英語研究の周辺ではなく中心であり、不可欠であるという認識が広まりつつあった。したがって、規範や変則を単なる正誤の問題としてみなしてきたこれまでの考えを改める必要があるが、このような脱規範性・変則性を示すデータはその大部分がまだ未発掘であり、かつ脱規範性・変則性を示すデータの検討が不十分なため、それを生み出すメカニズムや使用実態が明らかになっていないとは言い難い側面があった。

(3) 英語語彙研究の精緻化の必要性

脱規範性・変則性を持った形や表現は、文法という一般的規則の網の目から零れ落ちてしまう。そこで、個別の語を考察対象にする語彙研究を推進していくことが不可欠であった。語彙研究を担うのは、日本においては語法研究、海外では語法研究と親和性をもつフレイジオロジー (phraseology) という分野であるが、フレイジオロジーは日本では大きく注目されておらず、英語がもつ脱規範性・変則性を明らかにするためには、この分野の知見や視点を取り入れて語彙研究を精緻化することが必要であった。

研究代表者は、過去10年以上にわたって英語語法研究の立場で、理論的・規範的な立場から非文とされる表現や形が使用されている英語の実態を指摘し、フレイジオロジーの観点から説明を試みていた。(1)(2)で述べた流れを受けて研究代表者の行ってきた研究をさらに拡大・推進していくことで、英語の理解の深化に貢献することができるという認識を持っていた。

2. 研究の目的

(1) 英語の脱規範性・変則性を示すデータの発掘

従来考えられてきた以上に英語の振る舞いは「自由」である可能性がある。そのような奔放さは「逸脱」とみなされ、規則性を追求する従来の研究では重視されてこなかった。しかし、脱規範性・変則性を中心に考える立場では、その「しなやかさ」は英語の構造を作っていく創造性・革新性の現れとみなすことができる。したがって、本研究課題の目的のひとつは、新たな英語の脱規範的・変則的例をコーパスや手作業により発掘し、英語の現象そのものの理解の深化に貢献することにあった。

(2) フレイジオロジーの考え方にもとづく脱規範性・変則性の説明

本研究の目的のふたつめは、収集したデータをもとに、このような脱規範的・変則的形を生む「力」とは一体何なのかということに解答を与え、英語のしくみの解明につなげていくことであった。たとえば、規範的には common をはじめとする一群の形容詞は、it is Adj. that... の Adj. 位置に現れず、it is Adj. to V のパターンに現れるとされる。しかしながら、実例を観察すると it is common that... という形も確認できる。このような脱規範的・変則的な形は、いかなる理由から用いられるのであろうか。脱規範的・変則的構文や表現がどの程度使用されるのか、それを生み出す力は何かといった点を、コーパスなどのデータで定量的な観点から、また、フレイジオロジーの考え方を援用して定性的な観点から、明らかにする。英語の創造的・革新的な側面を明らかにして、従来の言語観の更新を促すような説明を提示する。本研究課題は英語の脱規範性・変則性の明示的な説明を提示して、英語語彙研究・フレイジオロジー研究の精緻化のひとつの形を示すことを目指した。

3. 研究の方法

本研究課題のデータソースとして、既存のウェブ上で利用できる COCA や BNC といったコーパスを利用したのに加え、ペーパーバックやウェブ上で閲覧可能な報道記事を独自にデータベ

ス化したものを利用した。データベース化したペーパーバックは研究課題期間を通じて30冊に及ぶ。独自に構築したデータベースの分析にあたって antconc コンコーダンサーを利用して大量のデータを処理することもあったが、基本的にはデータベースの英語を入念に手作業で読み、本研究課題の対象とする脱規範性・変則性を示す例を多数収集した。これは、本研究課題が考察対象とする脱規範的・変則的例が機械的な検索では拾いきれない形で現れることが頻繁であるからである。そのようにして収集した例から脱規範的・変則的例の類型を分類し、それをもとに既存のコーパスを利用・検索して類似例を多数収集した。このように、本研究課題は基本的に手元の実例からコーパスへ（実例回りコーパス行き）という手法をとった。

上記のような既存・自作のデータベースは、当然ながら定量的な情報を入手するのに大きな役割を果たした。一方で、本研究課題では定量的な考察に偏ることなく、入手したデータの文脈的な情報など丹念に読み解き、定性的な考察も取り入れた。あわせて、フレイジオロジー関連の書籍、実証的な英語研究の書籍・論文を多く収集し、知見の吸収につとめた。このようにして吸収した知見とコーパス・独自のデータベースから収集した実例を対照させ、脱規範的・変則的の形が生じる理由を考えていくという実証的手法をとった。

4. 研究成果

(1) 脱規範性・変則性を示す英語の多様な姿の明示的提示

本研究課題は、脱規範性・変則性を示す英語の多様なデータを発掘した。common タイプ形容詞 (common/usual/rare など) が It is Adj. that... のパターンに生じている例、day where.../year where といった英語の関係副詞の規範から解放された例、about how... のような連鎖において how の意味が希薄化している例、二重 that 構造の例、脱規範的冗長性を示す of の例、that 節を取る動詞の増加を示す例、前置詞が省略される脱規範的簡略化の例など、脱規範的・変則的振る舞いを示すデータを蓄積できた。また、研究代表者の過去の研究を補うデータとして、変則的な have until X が否定文に生じている例、assist が原形不定詞と共に使用されている例など、英語の理解のさらなる深化に貢献するデータも発掘できた。

(2) 英語の脱規範性・変則性を生む力の明示的説明

本研究課題が解明をめざした英語の脱規範性・変則性を生み出す力には、表現のフレーズ化、意味の変化、規範性の希薄化といったものが指摘できるが、特に関係詞を題材にして「語とフレーズ間の意味関係」を詳しく述べよう。従来の英文法では day/year といった名詞は本来的に「時」を表すものであるため、後続する関係詞は when であるとされていた。これは、一部の辞書が指摘しているものの、現代英語の最大の文法書である Cambridge Grammar of the English Language をはじめとして、基本的には「正しい」とされる規範である。しかしながら、仔細に実例を検討していくと、day where/year where といった形は決して珍しいものではないし、辞書が指摘していないような future/period where なども確認される。このような脱規範的・変則的例は、一般的に day が「場所」として捉えられるので where を後続されるとして説明される。これは、誤りではないものの、ではなぜ本来的に時の性質を持つ day が「場所」として捉えられるのかという説明が抜けている。本研究課題では、単に day/year といった語と where/when の語の関係を見るのではなく、at a moment/get to an age/imagine a future といったフレーズ全体の意味と後続する関係詞の意味的な関係性を見ることが重要であることを指摘した。すなわち、「...に到達する」「...を想像する」といったフレーズを構成する語句・表現の意味がその後で後続する day where/future where といった脱規範的・変則的形を生む力となっているのである。「到着する」の場所的な意味が後続の名詞の「場所性」を要求する、また「創造する」という意味は「場面性」を要求すると言える。このような研究結果は、英語の表現や形が流動性や可塑性を持つことを改めて示したという点において、従来の「ある形が可か不可か」というような二項対立的な考え方の見直しにつながり、英語の多様性の解明へとつながっていくものと考えられる。

脱規範的・変則的表現が生まれる際に「語と語の関係」ではなく「語とフレーズの意味関係」を精緻に見ていくべきであるという考えは、本研究課題で検討・分析した二重 that 構造、it is common that... のパターン、assist の原形不定詞のパターン、分詞構文 closing one's eyes の意味解釈などすべてに通底するものである。上で触れた、表現のフレーズ化、意味の変化、規範性の希薄化などは、この「語とフレーズの意味関係」に内包される可能性もある。このような研究結果は、語彙研究の精緻化は、フレーズと語の関係という、まさしくフレイジオロジーの考え方を取り入れることで可能になることを示唆している。

4年にわたる本研究課題の成果は、別途示した書籍や論文の形で公刊したが、その他にも原稿を提出済みのものが2本ある。そのうちのひとつに、アメリカ英語の変種と方言を論じた文献の翻訳がある。研究代表者が翻訳を担当した章は、英語の多様性を規範・標準性・方言という観点からとらえなおす概論部分であるが、本研究課題遂行にあたって得た知見を一般に還元するという意味において重要なものである。

以上のように、本研究課題の研究期間全体を通して、脱規範性・変則性を示す新たな言語事実の発掘・収集、そのデータをもとにしたフレイジオロジー的実証研究の遂行という、本研究課題が目的としたものは十分に達成できたと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 住吉誠	4. 巻 13
2. 論文標題 関係副詞whereが示す脱規範的汎用性 - 英語における脱規範性・変則性を生む力についての一考察 -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 エクス言語文化論集	6. 最初と最後の頁 147-176
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 住吉 誠
2. 発表標題 関係副詞 where の脱規範的汎用性について
3. 学会等名 関西英語語法文法研究会第44回例会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 住吉 誠
2. 発表標題 二重that構造という脱規範性を生みだす力について
3. 学会等名 関西英語語法文法研究会第45回例会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 住吉 誠
2. 発表標題 英和辞典に見られる語法記述の実証的検証 closing one ' s eyes の場合
3. 学会等名 関西英語語法文法研究会第46回例会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 住吉 誠
2. 発表標題 assist の動詞パタンの語彙文法的考察
3. 学会等名 英語コーパス学会語彙研究会2023年度研究会
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 八木 克正、神崎 高明、梅咲 敦子、友繁 義典（編）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 232
3. 書名 英語実証研究の最前線	

1. 著者名 吉田 幸治、金澤 俊吾、鈴木 大介、住吉 誠、西田 光一	4. 発行年 2023年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 232
3. 書名 話し手・聞き手と言語表現：語用論と文法の接点	

1. 著者名 田村 幸誠、住吉 誠、南 佑亮、中嶋 浩貴、松浦 幸祐（共訳）	4. 発行年 2024年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 -
3. 書名 変わりゆくアメリカ英語 方言と変異をめぐる12章	

〔産業財産権〕

〔その他〕

その他、原稿を提出済みのものが一本あり、中澤和夫、大室剛志（共編）『英文法を活かす（仮）』（開拓社、出版年未定）に収録予定である。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------